

最近話題となっている病虫害

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 果樹研究所 ブドウ・カキ研究拠点
上席研究員 新井 朋徳

クビアカスカシバ

学名：*Toleria romanovi* (Leech)

ブドウではブドウトラカミキリ、ブドウスカシバ、コウモリガ、クビアカスカシバなどの枝幹害虫が発生する。これら枝幹害虫の中でも近年クビアカスカシバが国内各地のブドウ栽培地において多発している。今回はブドウの枝幹害虫として問題になっているクビアカスカシバについて、生態や防除対策について紹介する。

分布：北海道、本州、九州

寄主植物：ブドウ科植物と考えられるが、未解明。

生態：クビアカスカシバはスカシバ科のチョウ目害虫で、成虫はスズメバチに似た外観をしている。ブドウ害虫としては大型で、成虫の開張は約4.5cm、老熟幼虫は約4cmになる。クビアカスカシバは年1化性の害虫で、成虫は6月から8月に発生し、特に6月中旬から8月中旬に発生が多くなる。雌成虫の寿命は1週間程度、産卵数は200卵ほどと考えられる。成虫の寿命は短い、羽化期間が長く続くことから発生期間が長くなる。このため、幼虫のふ化や樹への食入も7月中旬から9月にかけて長く続き、成虫の発生が終息する頃にはいろいろな大きさの幼虫が存在する。幼虫は小さいうちは乳白色であるが、大きくなると桃紫色を呈する。幼虫はブドウの幹や主枝の比較的浅い樹皮下の形成層を食害し、食入箇所には虫糞が認められ、虫糞には樹液が染みこんだ状態になる。クビアカスカシバは野外のブドウ科植物を寄主とし、園外で発生した虫が飛来し、被害が発生すると考えられる。このため、ブドウ園の中でも周縁部の木が被害を受けやすいと考えられる。加害部位は高さ80cmくらいまでの主幹に、また主幹から2.5m以内の枝で見いだされる傾向があり、また、過去に食害された部位やその周辺部が再度食害される傾向が強く、数頭の幼虫が1箇所で見いだされることも多い。

他のブドウ枝幹害虫との識別：ブドウスカシバやブドウトラカミキリは主に1年生枝を加害する。また、クビアカスカシバと同様幹や主枝を加害するコウモリガの幼虫は乳白色から淡褐色

の体色で枝の木質部を食害する。また、クビアカスカシバの老熟幼虫は加害部から脱出し、加害部直下の地表に移り、地表から数センチ以内の土中で繭を形成し、その中で越冬する。このため、他のブドウ枝幹害虫と異なり、冬季には枝、幹などに虫は存在しない。このような加害部位の違いや幼虫の体色、越冬生態から他の枝幹害虫と識別できる。

防除対策：ブドウのスカシバ類の防除剤として、カルタップ水溶剤やフルベンジアミド水和剤が登録されていることから、クビアカスカシバの防除で使用できる。ただし、成虫の飛来や幼虫の食入が長く続くことから、薬剤防除だけでは被害を完全に抑えることが難しい。このため、薬剤防除を実施した後に食入した幼虫の有無に注意を払い、被害が認められた場合には幼虫の捕殺を行う。クビアカスカシバは以前加害を受けた樹やかつての加害部に再度食入する傾向があることから、補殺のときにはこのような場所を重点的に観察する。本種は比較的大型の害虫であるため、1個体による食害範囲が大きくなること、過去の加害部が治癒しないうちに再度食害され、しかも複数の幼虫による加害を受けやすいため、樹勢低下や枝の枯死などの被害が発生しやすい。このことから、幼虫の食害が大きくなる前に補殺を行う必要がある。幼虫の捕殺は7月下旬頃から、ある程度の期間を空けて、繰り返し行う。なお、食入部位を早期に発見しやすくするために、冬期に粗皮削りを行うことも有効である。



図 クビアカスカシバの幼虫